

---

# トラウマと四番バッター

どらぐーん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トラウマと四番バッター

### 【著者名】

どりぐーん

### 【あらすじ】

23歳で無職でついてない男の谷重強真がとあることから有名企業に入社した。しかしそのかわりに会社の野球チームで活躍しなければいけない。しかし強真には重い野球のトラウマをもつていた。それが理由でトラブルばっかの強真だがついに試合開始。強真はトラウマに打ち勝つことができるのか?、

## おへがき（いじめしてもかまこませる）

じつ。じりべーんと申します。

じじは別にいじめしてプロローグから読んでもうしても全然かまいません

これを書き始めたのが中学3年でしかも冬休みでして、頭の中の数々のアイデアの中からこれを選びました。

いつかはほかのアイデアも書いていたらしいなともあります。

卒業までは終わりまで書きたいともつてこます。

今回書いた「トライウマと四番バッター」はタイトルを考えるのとかなりの時間がかかりました。

なかなか、これだーとおもえるタイトルが思いつかず五年くらい考えました。w

結局微妙でゆうかありがちなタイトルになつたやいました。

初投稿のストーリーなんですが、むちやくちやがんばってかいています！

書いては見直しの繰り返しでして、誤字や表現のミスやいろいろむずかしくて納得のいくまでかなり時間がかかっている状態なんで

W。受験勉強と並行するとかなりキツイです W

「」のサイトで自分の作品が書籍化されるのをめざしてがんばります！

まだ全部書ききつていかないかもしませんがどうか、

おつえんよろしくおねがいします！

## プロローグ

「プロ野球選手」

それは男の子の大半が最初の夢としてねがつたこと。

また、最初に絶対にかなわない夢だと悟つたこと。

いわば男の子の人生で最初の壁である。

本当になれるのはほんの一握り。いや一つまみくらいの選ばれた人間だけである。

人の何十倍、何百倍練習しても容赦なく振り落とされるほどの絶大な壁。

その壁をズタボロになつて登りきつたほんのわずかな人間が見ることのできる世界。

谷重強真たにしげつよまさはその壁を登りきることができなかつた大勢の内の一人であつた。

大学まで野球一筋でやつてきた。朝晩の練習を毎日やつてきた。周りの人も認めるくらいの努力をしてきた。数えきれないほどの涙をのみ苦しさをバネにしてきた。

しかし、それでもそのはるかな頂いただきにはとどかなかつた。

まさに生きがいを失つた強真だが今後の人生のため、今までの自分にピリオドを打つために野球のことは忘れると心に誓つた。

その後はまじめに勉強し朝日晚が勉強に一筋だつた。家族に樂をさせようと必死になり充実した日々を過ごしていた。資格もとつた。

現在は大学も無事に卒業した。二十三歳。

職業は、 、 、

無職

## 第一章 1 リストラと友人

夢を見ていた。とても悪い夢。

何度もみる夢だ。いつまでたってもあの瞬間、出来事を忘れられない。

俺にとつては人生の分かれ道になつた夢だ。あれのせいでの一つの道がなくなつたともいえる。

絶対に忘れるることのないトラウマ。

「ここは、ビックだ。」

目が覚めたら見慣れない部屋のベッドにまつっていた。

(ゆめかな?いや、現実だ。)

「思い出せ。何があつた?」

あれは確か昨日の朝、

～昨日・午前10時～

「はあ。」

無意識にため息をもらしてしまつ。なぜかつて？簡単にはおひ。バイトがクビになつた。

今の自分の生命線ともいえる唯一の稼ぎ場所。その名も「焼肉屋ホームラン」。

特別うまい店ではないけど値段のわりにナットこうつな量をたべれるこの辺では有名なお店。（時給780

そこで週五日、一日8時間くらい働いて食事も一食でるとゆうなかなかいい仕事だつた。

セレクをたつた五分前にクビになつた。

理由を聞いてみるとお客様からの評判が悪かつたらしく、なんでも三分おきにお冷ひやしありについて心配してくるのが正直ウザい。うしい。

自分ではそれを一番サービス精神でがんばっていたのでそれを聞いたときはけつこううしょしきだつた。でも客観的に考えて自分でもたしかにウザいとおもつた。

不覚だつた。いまさらだがなんで気がつかなかつたんだろひ。後悔先にたたず、前もつてよく考へるんだつた。

「なにやつてんだるつな俺は。せつかくみつけたいいバイトだつたのに。バカだな、世界一バカな無職がここにいるぞ。」

「うやつて自分を責める。そしてつまは、

「てゅーか、なんで俺なの？もつとダメなやついたじゃん。おれ遅刻一回もしなかったじゃん。よく遅刻をしてはドジをやってたやつがいたじゃん。つまみ食いしてたやつがいたじゃん。あいつらよりは俺のほうがマシだつたじゃん。」

グチって他人を責める。最低だな俺は。

だがそつ思つていても次から次へとグチがこぼれる。もつやだ、死にたい。酒でも飲もうかな？だめだ酒を買つお金がおれにはない。

いまは真冬の朝方。気温も心も冷めきつていた。

「、、おつ。」

そんなことを考えていたらさつきこいつたあいつらが前のほうからやってきた。うわ、きづかれたよ。

「「あれーッヨジやーん！何してんのー？」」

ふむ、あいかわらず見事なハモリ。

手を振つて近づいてくるそいつら（あいつら）は一人は背の高い顔が一枚目でハチミツのように甘い声をしたナイスガイ。もう一人は真冬のぐせに汗だらだらで半袖で背の低いデブ。

前者の名は友田彰ともだあきら。残りの名は太森和丸ふともりかずまると言つやつだ。

「今日は早上がりなんだよ。」

つよがつてみた

「うそだね。」

速攻氣づかれた、彰に。

「ジニア」とだから早上がりの許可が出ても、田あらこますー、とかいつて弓がなそうだし、なにがあつたの?相談のるよ?」

「、、、つたぐ、なんでこいつは変に勘がいいくせにだれでも予想つく所はわからねえのかな。」

「やうだよーー。僕たちは友達じやないかあ。なんでも相談にのるよ。あ、やうだあ、チヨウたぐるうー。」

「こつもこいやつなんだよなあ。デブだけど。

「いや、チヨウはいいや。べつになんでもねーよ。」

「こつらは結構やせしこのと、天然があるのでこくめないんだよな。まさつきにくみかけたけど。

だが今はそこが逆に痛い、苦しこの状況である。

なぜに彰が遅刻がおおいのかとゆうと、はつきり言つてこいつはかなりトロい。決して悪気はないのだがカレンダーを読み間違えたり日覚ましの設定をミスつたりする。

だから来なくてもいい日にきたり、むちやくちや早く来てたりもする。はたまたジモツくよく店でミスをしてこる。

しかしそういう所がだれもこくめ、しかも店長からもお姉様からもかわいいと評判になつてこまや店のアイドル的存在となつている。

和丸がつまみ食いをよくするのは、本人も無意識のうちにやがてしまつてゐるしさ。何度も注意しても治らじとのない問題点である。

「おまえらはひどいんだ、こんなところだ。」

「いや、店長によばれても。」

「和丸もか？」

「うん。やうだよ。」

さうなるな。あーうんさうなる。

「遅刻しそぎてクビかも。ヤバイ。」

「おまえはないだろ。」

「うーん、僕もお、あぶないかなあ？」

「おまえはあるだろ。ふつうにあるだろ。」

「ぬう、なんだとか、ひどこじやなにかあ。おひつけやうやんな  
ことお。」

「ひどことは思わない。血業血縁だとおもつて。」

「むづきゅう。」

返す言葉がないようだ。口もつてこない。

「とりあえず、そのあとに集合しないか。」

「わかつた。おわつたらメールするね。」

「ばいばいだよ。」

和丸はブンブン手を振つて汗をまきちらしながら、彰は軽くてをあげてその場を去つて行つた。

「とりあえずどこで待つか。」

そんなこんなで、おれはとりあえず近くの喫茶店にはいつていいくのだった。

そのあと起つづく悲劇も知らずこゝ、

「死にてえ。」

俺は現在雪よけのために公園の屋根つきのベンチのしたで自動販売機で買ったコーンスープで手を温めつつスープをのどに通らして体をあたためていた。

ふしきなものでスープで胸元はあたたまつても俺の心とサイフはちつともあたたまらない。まあ後者は言つてみただけだから気にしないでくれ。

とりあえず俺は今途方に暮れている状態なのだよ。

俺の体の中でコーンの粒の一粒一粒が俺をあたためようとしてせりせりとがんばっているが俺の心はコーン達を笑ひにけるかのように熱エネルギーを奪つていく。

「やっぱここのままだと低体温症で死ぬかも。」「あー。やっぱ死にたくない、帰る。」

皆様わざわざは軽々こじへ死にたいとかはござりてすみませんでした。やっぱ命は尊いね。

「つたぐ、マジでつこひないな今田は。今年一番の厄田かも。」

まだ一円の頭だと言つたことないことを言つてゐるじぶんがなきないぜ。でも本当にヤバイかも。ついてなにつてレベルじゃなにぞ今

曰は。

ああ。足取りがゆがんでる。平衡感覚が機能していない。なんでこんなにショック受けてんだろ、てゆーかショックすぎて何があつたか忘れちゃった。

「なんだっけ、たしかあれは一時間、いや二時間だっけ？確かにそれくらい前、」

そうして俺は帰り道、今日のできじとを思い出しながら帰つてつた。

（三時間前）

「、、、つたくおせーな。」

おれは喫茶店のなかでとつぶに冷めてるあひりーハーヒーをちびちびすすつていた。カツコつけてブラックをたのんでみたけどやっぱにがい。たのむんじゃなかつた。

彰と和丸に送った約束メールから三十分。一人の姿はまだない。メールも来ない。

「なにかあつたのかな？」

いらぬ心配が脳裏をよぎる。

「まあ、どうせまたなにかドジつてんだろうな。」

心配した時間じつに四秒。自己最長記録の一秒を更新した。

しかし和丸も遅い。やつにとっては珍しいことだ。

「しゃーない、メールすつか。」

おれはいまだに型落ちしたパカパカのケータイを恥じらいなく使っている。おれだってスマホがほしいよ。何が好きで十年前のやつ使うんだよ。

きつといまもどこかでクスクス笑われているんだろうな。でもこれでもメール打ちやすかつたり、使い勝手はいいんだから、大丈夫だ俺のケータイは。

何度もになるだらうこと考えながらおれは時代遅れの機械で文面をひづる。

「（今どこにいんの？）つと。」

一斉送信。レトロな画面をとじて返信を待つ。そして俺はまた飲めやしないブラックコーヒーをちびちびとするのであった。

待つこと二分。音質の悪い着メロの発生源をじじえた手であやつる。確認。

「（喫茶店）つと、メールでもハモるかあいつ。そしてなんで一人一緒にいるのにじつからもメールがくるんだ。」

そうじやないだろとため息をつき返信。どこの？とか打つても長

引くから田的だだけを簡単につたえる。

「（おれがいった喫茶店はカフュ・イン・マウンテンだ。カフュ・イッシュ・満点じゃない。）うと。まったく、なぜここにひらがひづやくやつりがここにたどりついた。

送信。ミルクで薄めすぎたもはやミルクのコーヒーをこっけりのどにながじこんで再び求人雑誌を手に取り待つ。まつこと十分。よつやくやつりがここにたどりついた。

「あひシラ。つたくも～ビレーニたんだよー。すつとまつてたの」

「やうだよひ。まつてたんだぞひ。」

「レーニにこたよ。おそらく和丸がむこひで満点イチゴジャム納豆サンドと満点ドリンクを頼む前からな。」

「残念でしたあ。きよひはあ、満点チラリあとアボカドサンドだもんねえ。」

まあそれはおこといて、本題に入る。

「それで、なんぞ店長に呼ばれたんだ。彰かひどいわ。」

「ああやうやう、きこてよ。わしきわ、店長がいきなり俺をクビにじれわあ、」

「おやこれは意外。ここがクビになるとせ。」

「マジか。本当のことこうと俺もクビになつた。」

「ぼくもだよひ。」

「予想どうりだ。」

「むうう。」

しかし三人一齊にクビにするってなかなかないよな。なにかあったのかな?

「フフフ。やつぱり。つつきそんなんきがしたんだよね。」

「そうそう。だからこれからまたバイトさがせ、せ、」

「ツヨもあの人に入スカウトされたんだね!」

「、、、は?」

「おまえ今なんていつた?」

「だから、ツヨもあの有名ホストの店長にスカウトされたんでし  
よー。」

あれ?話がつかめない。

「ちひきさあ、いきなりクビになつたと思つたらさあ、知らない  
おねえさんがでてきてさあ、あなたは明日、いや今この瞬間から私  
の店のメンバーよ。とか言われてさあ。」

「、、、え?」

「すゞぐ混乱してたらさあ、おれがあの店の正社員になれるとか  
いわれてさあ、もうすぐにおーケーしてさあ、明日から来なさいつ  
ていわれてさあ、もうほんとに舞い上がつちやつてさあ。」

あれ、どうゆうひじだらうか、頭の中がふわふわだ。マジコマロ  
みたい。

「しかもまたツバと一緒になんて、せんとこ奇跡だよねー。」

「いや、ちよつとまじ。」

「ん~どしたの。」

「いや、やの。」

「れはこつとかねば。」

「じつは、おれはおまえとまだ恋の感じで、やの、なまじつか。」

「え。 お世間にの?」

「やめりやめりやめりじやなこが、、

「まあ、や、そんな感じかな?」

わがわくわくわくわくをつべ。

「やあ、 せつか、 すじこ残念。」

あかられせに彰のトノシツンがわがつた。うへ、ぬけぬけ話つこ  
か。

「フツフツフツ。」

「うにわくなぜか和丸が不気味に笑つ。

「なんだよおまえ、感じわつーや。」

「いやあ、彰君にはわるいけども、せんせん、また強真君とこつ  
しょでうれしいんだよお。」

、 、 、 はえ？

「じゃ、じゃあおまえもスカウトか？」

「うん、そうだよ！」

嘘だ。  
信じないぞ。  
信じてたまるか。

「さつきい、テレビ局のひとからあ、グルメリポーターやらないかあつてえ、さそわれたんだあ。」

「嘘だ」と、せ、な?

いせほんとだよ さうき僕も見た

信じたくない。大変信じたくないが、、どうも本当らしい。たしかにピッタリな気もする。

うか。  
」

「そ、 そうなの。 残念だなあ。」

一  
じ  
や  
あ  
、  
み  
ん  
な  
バ  
ラ  
バ  
ラ  
？

たしかにバラバラだ。いろんな意味で。

「そうみたいだよ。でも、僕らの友情は永遠にちぎれなこゝれりだよー。きっと、どこかでまたいっしょだよー。」

俺を除いた一人だけの会話がはずんでいる。俺はと言つと頭も視  
界もマシユマロパーティー。

「うん、分かった。じゃあこれからはみんなお互いにがんばろうねー。」

「がんばるんだよ!」

わーいマシュマロがいっぱいだあ。あはは。

「じゃあまたどこかでー心の友よー！」

ジャ○アンか。

心の中でツツ「コミ」をいれていたら一人はカラソコロソドアをならしてその場を去つた。

その場に一人とり残されたおれはとりあえずふかくため息をつく。

「はああああうううあああああああ。」

なんで俺にばっか不幸があつて、あいつはいいことばっかなんだろつ。バイト中でもあきらかに給料がちがつたし、俺がミスると密の田はこわくて、彰がミスると密はるしてたし。

和丸は俺以上におこられていたの。

ほんと人生は不公平だと実感するぜ。

なぜかマシュマロの味しかしねえ一杯めの「コーヒー」を飲み干しておぼつかない足取りで会計をすませるために動こうとおもつたら近くの女子校生の会話が耳にはいった。

「わつきのあのカツ「コイイ人、あのクラブにいくんだって！」

「ええーマジイ！ ヤツバ、むっちゃテンションあがるんですけど

！」

「ねえー。」などこにうよー。」

「いくいくー。ぜつたいいいくー。週七日いくー。」

まいにちじやねえか。

「あと、よくあの人を採用するところあつたよねえ。」

俺のことかそれは、..

「ねえ。むちゅうけるんですけどー。」

「よほじ曲者ぞろいなんだらうねその店ー。」

、、、、、

「もしかしてゲイバーじゃないー。」

「それそれ！絶対そうだつてー。」

「キモーー。」

、、、さんざんじつてくれるじやねえかあオイ。

俺はそこの女子一人をにらみつかる。

「うつわ。うつちみてるよー。」

「キッモーイー！」

「きっと女に食えていてわたしたちねらつてんじやないー。」

「うつわサイテーー。」

やべえ、殴つちまーいやつだぜ。

「ああゆう人は結局社会の歯車にくみこめずに入知れず死んでい

くんだらうねー。

「ねー。」

「あ、あれ？怒りをこめて悲しみがこみあげてきた。やばい泣き声だ。

せめて匂ひえなによひにしゃべつてくれればいいのに。残醜にもわざわざまいえぬよひしちゃべつてこな。わざとかなへとわおもべてえきた。

おれは会計をすませ店をでていった。俺の精神面をズタズタにしたこのみせはもう一度とくるまいと心に誓つた、・・・、

豚に出しちゃった。頭から足の先まで鮮明に豚に出しちゃった。豚の頭から足の先まで鮮明に

「コーンポタージュもいまやマッシュマロ味の液体と化した。飲む気失せた。

「思い出すんじゃなかつた。」

心の底からそう思つ。だが時すでに遅し。あの一部始終を再インストールされた。

これがどういふのか。身も心もマジコマロとした今何せん  
気がおこらぬ。

とつあえず歩こう。上を向いて歩こう。やつ上を向くんだ俺。いかなる時でも上を向いてあるければ、

ピチヤツ

「ヽヽヽヽヽヽヽヽ

断言できる。今年一番の厄だ。

生き物すべてが俺を見放しているように思える。鳥までもが、

ピチヤ

「ヽヽヽヽヽヽヽ

何も考えるな。無心になれ。絶対に動じない不動の心を、

ピチヤ

「しつけえぞオイ！」

もういい。何もかも失せた。あのマシコマロさんも失せた。

俺の両目と鼻に同じ物体が落ちてきた。うわ、くっせ。

もういい。何も望まない。

「死のう。」

近くに大きい川がある。そこにまっしづらだ。

鳥のフンをぬぐつておれは一直線にかわにむかった。

途中何度も笑われたが気にしない。数分後には忘れることだ。

、 、 、 、

着いた。

この辺では地味な川だしかしけつこう大きい。

程よく静かだ。橋の上に女の子が一人。

では早速取りかかる。まずは橋の真ん中にこう。

怖がる前にスタスターと歩く。着いた。女の子のすぐそばだった。  
この子おどろくかな?いや関係ない。とりあえず準備を、 、 、 、  
つて、あれ?

女の子の様子がおかしい。まっすぐな目で川をみている。それだけだけど、 、 、

なにか変だ。どうしたんだろう。いや、

俺は我にかえり死ぬ準備をととのえた。

そしたらつきの瞬間。

ザッパーン!

女の子が川に勢いよくダイブした。

「！、やべえ、助けないと！」

ほほ無意識におれは川に飛び込んだ。

# ザツパーン

「ふは！ つ、冷てえ！」

幸い流れがそこまで速くないので泳げば追いつくが水温が低すぎ  
る。

「まちくしなべど。」

やつもまでの自殺願望はもうビリにもなかつた。

ただ女の子をたすけたかつた。

あと距離は2メートルくらい。

「どういた！」

女の子はぐつたりしている。  
意識もない。

俺は女の子を抱えてなるべくはしゃぎおみこだ。

なんとか岸についた俺はまず女の子の様子をうかがう。結構やば  
そうだ、みずを飲んでいるかもしれない。

「おい！大丈夫か！」

叫んでみるも返事はない。軽くたたいても反応を見せない。

「くわー。」

（状況が状況だ。しかたがない。）

俺は女の子の口に口をつける。

そのあと強く息を送る。

そして胸をなんども強く押す。

（恥ずかしいことじやないぞ。おいしいとか思っていないぞ。）

そう自分に言い聞かせながらなんども繰り返す。

そしたら。

「つぶつはあー！」

（よし、息を吹き返した！）

「ゲホッゲホッゲッホー！」

「大丈夫か！？」

「「つ～ん。」

意識はもどつたがまだぐつたりしているよつだ。

（とりあえず救急車を。）

「「げつ。」

ケータイがこわれている。あいにく防水じゃなかつたらしい。

（まじかよ。じつじよつかな。）

まわりには誰もいない。

「「まつ。」

ムクッ

「「わ、びつくりした！」

女の子があきた。何があったのかと呆然としているよつに見えた。

（「うわー（

その子は小柄だがいいスタイルをしていて整つた顔をしていた。

（やべえ、すげえかわいい。）

俺は少しの間みとれていた。

「ヽヽヽヽヽヽ」

「あ、気がついたか？」

「！」まだれ！？あたしはまだ！」

（相当地乱しているみたいだ。まあむりもないか。）

「と、とつあえず落ち着け。」

「ほえ！？あんただれ！？」

「川に落ちた君を助けたひとだ！」

「なにしてくれんのよ！」

「」

「ぐはあーなこすんだ！」

おもひへやほっぺをなぐられた。かなり痛い。

「せつかく死のうと思つてたのこー。」

「自殺はいけませんー。」

「子供扱いすんなー。」

「」

「ぐはあーいひーなー。」

一発田。気性はかなり荒いみたいだ。

「じゃああんたは何しようとしてたのー。」

「なにって、いわれても、、、、、、」

「自殺でしょー。もうでしょー。ピートでそんな死んだ田をしてるわ  
！何邪魔してんのよー。」

「じ、自殺じやねーよー。」

「だつたらなんなのよー。」

「じ、自殺以外だよー。」

「ゴッ

「寝言は寝て言えー。」

三発田。全部おなじと」。

「ちつくしょー。わつきから聞いてりや いい氣になりやがつてー。」

「もういい！死ぬ気失せた！帰る。」

彼女は怒り狂った様子で180°方向転換した。本当に帰るよつ  
だ。

「ちよ、まちやがれー。」

「なによー。」

「いや、その。」

「意味分かんないー。」

「もう自殺とかすんじやねーぞー。」

「つー大きなお世話よー。」

彼女は一瞬だが悲しい顔をしていたと思つ。

「家族が悲しむぞ！」

「つ！あんたに何がわかるのよー！」

「なにもわからねえ！」

「いみわかんな、、はつぶえツクショーィー！」

盛大なくしゃみをした。

「だ、大丈夫か？顔鼻水だらけだぞ。」

「うつさい！帰る！」

彼女は何のためらいもなく手で鼻をぬぐつた。お前女か？

「まてよー！」

俺は彼女を追つた。

「ついてくんna！」のストーカー！

「ついてかなかつたらまた自殺するだろ？がー！」

「うつさいーおおきなおせー、、、」

また殴られるとおもつたらなぜか、、

「いいわよ。」「なにその急激な心変わり！？」

彼女は何かを思いついたようだつた。にやにや笑つてゐる。しかし、俺はその時は気がつかなかつた。

「気が変わつたのよ。ついておいで。」

「わけわかんねえ！」

「来るの、来ないのー。」

「いくよー！」

「じゃあこーむしょ。」

（なんなんだまつたくー。）

そんなこんなで俺は彼女について行った。

これが俺と彼女の「れかのむかわかな」のはじまりだった。

た。

## 第一章 完 泥棒とチーム入団

現在、俺は助けた女の子と一緒に彼女の家に行っているところだ。

「あんた名前は？」

「お、おれか！？」

「ほかにだれがいんの！？」

「いや、いきなりでびっくりした。俺は谷重強真だ。おまえは？」

「おしえなーい。」

「ふざけんな！」

なんなのだ！こいつは。

「うつさいなあまつたく。」

「だれのせいだ！」

「私は田中花子よ。」

(うそつか！？)

「むうう、そうか。いくつだ？」

「23歳。」

「嘘だ！」

「」

「ふつ殺すわよー。」

四発田。また同じじとひだつた。すこし血がにじんできた。

彼女は見た田と年のギャップにコンプレックスを感じていたらし  
い。

「わ、悪い。何月生まれだ?」

「四月。」

「まさかの年上!?」

「え、あんた年下なの!?」

「23歳、六月生まれだ。」

「へー以外。」

ドンッ

「キヤツ!」

花子が尻もちをついた。なにかぶつかつたみたいだ。

「大丈夫か!?」

「なにすんだコラア!」

「お、おいおい。」

ほんとに女かお前?

後ろから男がぶつかってきたらしい。そのつじろから、

「たすけてー泥棒よー!」

すごい急展開。

「なにーあいつか。」「

なぜか俺は冷静だった。その辺のいじをしてことぶ。

「あんた、それでなにする、 、  
「くらえー！」

ブンー！と俺が投げた石は、 、

「なにー？ぐはあー！」

泥棒の頭に見事命中。泥棒は倒れこんだ。

どうやら氣絶したようだ。「うー」かない。

後ろからおばさんが近づいてくる。勢い走ったようだ、息が  
上がってる。

「あ、あんた、はあ、あり、ありがと、ね。はあ、  
「大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、う。はあ、これ、お礼ね。」「

野口英夫を一人もらつた。

「はあ、ありがとうございます。」「

「じゃ、じゃあ、ね。」「

おばさんはその場を去つて行つた。

「（なかなかの肩ね。）」「

花子は何かを考え込んでいたようみえた。

「ん? どうした?」

「いや、なんでもないわ。」

「そうか。じゃあいこ、」

「助けてー! 泥棒よー!」

「またかよ! ?」

「またみたいね。」

「どうせまたらしく。」

(へそー! いしがねえー! )

もう周りにはこしはない。俺がとった行動は、

「まちやがれ! 」

走った。

「あんた、走って追いつくへ距離じや、」

「ここでまつてろ! 」

「ちよ、ちよつとー。」

(あそこかーーの距離なり追いつくーー)

俺は走った。けつこつ距離はあつたが以外とすぐには追いついた。

「まちやがれ！」

「ひい！なんだおまえ！」

「つかまえたぞ！」

「ぐはああ！」

「ぐはああ！」

ドサツ！

思い切り押し倒してやった。そしたら氣絶したみたいだ。動きがない。

おばさんが近づいてくる。やつぱり息が上がっている。

「あ、あんた、はあ、あり、ありがと、ね。はあ、」

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、う。はあ、これ、お礼ね。」

野口英夫がまた一枚。

「はあ、ありがとうございます。」

「じゃ、じゃあ、ね。」

おばさんはその場を去つて行つた。

「ヽヽヽ、戻るか。」

俺は一人の英夫を濡れてないポケットにしまった花子のところへ行つた。

花子はその場を動いてなかつた。

「じゃ、やいくか。

「」

(たかたかの足跡)

១៩ ॥ និមិត្ត ក្រពិនិត្យ ॥ ៧

「どうした?

「なんでもないわ。

「力ナシ」ヒツキ「」

まだ。後ろから走つてくる音がきこえる。

「てめーら！そ」をどけ！ぶち殺すぞ！」

「しつけええええ！」

ゴキヤツ

「どうせやー！」

振り返りざまになべつてやつた。

「す、すゞ」い音したわよ。」

花子があぜんとしている。

泥棒は気絶している。てゆーかさした。

おばさんのが近づいてくる。息は上がつている。

「あ、あんた、はあ、あり、ありがと、ね。はあ、」

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、う。はあ、これ、お礼ね。」

三人目だった。おばさんも野口英夫も。

「、、、、あじがどじう」「あります。」

「じゅ、じゅあ、ね。」

おばさんはその場を去つて行つた。

「つたぐ、もつないよな。」

「（力もあるわね。）」

「じした？ わつから。」

「ねえあんた！」

「おうーー？」

花子がずいっとよつてきた。いい香りがした。

「スポーツとかやつてた！？」

「、、、走、まあ一応。」

「なにをー？」

「、、、野球を。」

（なんなんだよ。）

「（やつたー、ハハハ。）」「

「、、、それがどうした？」「..

「あなた無職でしょー。？」「

「ー、っ、な、なんでわかつた？..」

「血殺しよつとしたじゃない。」

「ああ無職だー。」

開き直つた。

「ハヌカニー。」

怒られた。

「すまん、、」

「あんた仕事ほしーー。？」

「むつちやほしー。」

（浙江大学だ。そんなこと。）

「じゃあさあ。」

「じゃあ、わからん。」

「わちの会社来ないー。？」

「、、は？」

「 言ってる意味がわからない。」

「 あなたにぴったりのじ」とあるわー。」

、 、 、 え？

「 いやだから、あなたにぴったりのじ」とあるわー。」

「 マジか！？」

「 マジよー私が紹介してあげる。助けてくれたお礼に。」

「 そんなことできんのー？」

「 いいコネがあるのよ。ついてらっしゃいー。」

「 わー、わかつた！」

（ まじかよーこんなことってあんだー不幸が続いたもんなー厄日なんかじゃなかつたー！ ）

俺は何も考えずに花子についていった。もつ少し疑えばよかつたと思う。ついて行つた所は結構ビルが多いところだ。そのひとつは十階建てくらいのビルに入つて行つた。

藤木原スポーツと書いていた。

「 うーひー、あの。」

「 そ、う、よ。世界の藤木原スポーツよ。」

藤木原スポーツとは、世界的に有名なスポーツ用品メーカーだ。

野球から剣道まで幅広く作つてゐる。

「こんな濡れたままの格好で大丈夫か？」  
「大丈夫よ。問題ないわ。ここでまつてて。」

そういうて花子はカウンターに行きそこの人となにかしゃべっている。カウンターの人がすごいペコペコしてゐるのを見るとかなり強い「ねらし」。

待つこと数分。

「ついてきて。」

エレベーターまえでよんでいる。とりあえずついていくとしよう。

おれと花子がエレベーターに乗ると花子が最上階のボタンをおしだ。

「なあ。」  
「なに？」

俺はさつきから聞いたかつたことを聞く。

「いったいどんなじ」とをするんだ？  
「それは言つてからのお楽しみ。」  
「むう。」

ついた。

なかなか清潔的なビルだ。ホコリひとつない。

フレベーターを出てすぐの部屋に行へりしご。社長室と書いてある。

「うーん。」

花子に扉を開けてもらひ中に入る。かなり大きな部屋だ。まさに社長室って感じ。

中太りの社長らしきひとがソファに座っている。

「おお香織。よへきた。」

「、（え、香織？）

「連れてきたわよ父さん。」

（花子、どうも「」とだ？）

おれは田で訴える。

「（あとで話すわ。）」

（なんだよそれ、）

不安が頭をよぎる。

「この子かい、香織が田を付けた子は。」

「やうよ。」

「貧乏くせに子じやのつ。」

力チソヒセタ。

「でも腕は確かよ。」

「そうか。お前名前は？」

「は、はー。谷重強真とこーまゆー。」

「そう硬くならんでいこ。」

「は、はあ。」

けつこうひがわくな人そうだつた。

「いこで仕事をしたいかい？」

「はいーもちろんです！」

「わが社にあへゆですかい？」

「はい！」

「やうか。じやあ、四口から来なきこ。」

「は、はーーーありがとひがこますー。」

(こんなすんなりこくものなのかな？)

そのとき舞こ上がつてた俺は疑いなど感じなかつた。

じつめひつめを感じた不安な心中したみたいだ。社長が言つた言葉は、

「君は今から、わが社の野球チームのひとつじー やじじー。」

「、、、、、、、、、はー？」

( は？野球？ どうしただ？ )

おれは今日一番混乱していた。

「明日から練習に励むよ！」

「え、ちょ、ま」

「では、明日からがんばっててくれたまえ！」

「え。」

「では下がりなさい。」

話は終わった。退室命令がだされた。

「え、えええええええ！」

「はいはい、こへわよー。」

「ちょ、花子まで！」

「いいから行くのー！話はあとよ。」

花子？連れられて俺は部屋を出た。

俺は花子？を連れて外に出る。

言いたいことひどい。

「ひつと説明してもうじやねーか！」

「私の名前は藤木原香織。<sup>ふじきばなかおり</sup>」この社長の娘。あなたの仕事は？」この野球チームの一員になつて試合に出る」と。

「ぐるー。」

闇にひとしてたこと全部言われた。

「あたしは今のマネージャーよ。明日からむかえにいくわ。  
「おやつとまでー。」

「えー。」

「ぐー。」

なにかを首もとこやられた。

「な、なにしたー?」  
「おやすみー。おたあしたねー。」

「ま、て。」

眠くなつてこべ。ぐいせり今、睡眠薬を盛りられたみたいだ。

「ぐ、ちへひ、ぐ。」

バタツ

俺はその場に倒れこんだ。黒服のじつに一人がおれをぐいかこは  
じんでいる。

「ま、ち、や、が、れ、」

薄れしていく意識の中俺はやはり今年一番の厄口だと確信した。

思い出した。

思い出すんじゃなかつた。昨日からそればつかだ。

あのあと俺は氣絶した後にこの部屋に連れてかれたみたいだ。

ちなみにS.F.のような真っ白な部屋でベッドに縛り付けられてるわけじやなくて普通の部屋だ。大体六畳くらいの部屋で、ベットと机といすが一個ずつある。それだけ。

「ヽヽヽヽ 気分わりい。」

あの夢を見た後はいつも大きな脱力感と軽い吐き氣がする。それに加えてむりやり寝かされて氣分が悪い。

「ヽヽヽヽ あら、おきたよ。」

俺は声のするほつに頭を傾けた。いつの間にか香織が部屋にいた。

「うううはビーッだ。」

俺は单刀直入に聞いた。

「へえ、意外と冷静なのね。」

「今はおこるきにならないんだ。」

「顔色悪いわよ。大丈夫かしら。」

「大丈夫じゃない。」

香織はふーんとあいすちをうつっていました。そしていたつて普通にしゃべりだす。

「ここはうちの野球チームの寮よ。」

「ふーん。」

俺は冷静だつた。それにたいして香織がすこしつまらないようだつた。

「驚かないのね。」

「予想ついてたからな。」

「そう、まあいいわ。」

全然よくない。

「質問してもいいか?」

俺は普通に問い合わせた。

「みつづまでよ。」

そうか。ではさっそく。

「俺はここでの会社で働くといったよな。」

「一つ田ね。いったわ。勿体ない事に使つたわね。」

( しまつた。確認のつもりだったのに。 )

「なぜに俺は野球チームに入っているんだ?」

「二つ田ね。あなたの仕事はこの会社で組織している野球チームの一員としてプレーしてもらひつわ。その際に自社製の道具を使ってもらひてデータを取ることよ。あなたの野球のセンスをみてここにふさわしいと思い、私からスカウトさせてもらひつたってわけ。」

隅々までキッチリと教えてくれた。

「ノーリ寧にどひつむ。」

「どういたしまして。あと一つね。」

俺はすでに言ひつことを決めていた。それは、

「今すぐにやめたいんだが。」

「ダメよ。」

即答だつた。

「なんでだ?」

「私が困るから。」

「それだけか?」

「もちろんチームとしても、会社としても大打撃よ。」

嘘をつくな。

「とひてつけたよつな言い方だな。」

「そうかしご。」

「うだとも。

「俺はすゞく野球をしたくないんだが。」

「なぜかしら。」

「それは言いたくない。」

「トトロマグがあるからじしょ。」

「、、、、、」

「、、、、、」

なんでわかつたんだ。」

いやまぐれかもしれないからな。あいつとそうだ。

「なんでそう思つんだ。」

「第一章で言つてたじやない。」

「オイ、それはNGだ。」

「だいたい、知つてて聞きたくないのよね私は少なくとも小説上のマナーは守れ。」

「分かつたわよ。」

とゆうわけで、テイク2。

「なんでそういう想つんだ。」

「うーん、何となくかな?」

超能力者かおまえは。

「図星なの?」

「決して違う。」

「あらあそりなの。」

二タ二タ笑いやがつて。

「違うって言つてゐるだろ。」

「あら、どうしたのムキになつちやつて。」

「の女、Sだな。

「なんでもねえよ。」

「そう、ならいいの。まあそれは置いてといて。」

香織は背中から大きいボストンバッグを取り出した。どうにあつたんだ？

「あなたには今から野球の練習にいってもらひや。」

「断るといつたら？」

「殺すわよ。」

香織は背中から拳銃を取り出した。お前の背中は四次元ポケットか。

モデルガンだと思うが雰囲気できに本物にも見えて俺は本能的に警戒してしまつ。

「つこてきでもらうわ。」

「、、、、」

（断らないほうがいい気がするな。命的にも。）

香織は俺が了解したように思ったのかバッグを押し付けてくる。俺はしぶしぶ受け取つた。

「まつたく、ちゅうとまシャキッとしたりどつなの。男のくせに。」

「うつせーな。どうだつていこだろ。」

「ちこちこ男ね。」

「、、、大きなお世話だ。」

しばらく沈黙が続いて香織が手でひつちに来いとさせた。俺はとつあえずついて行くと寮の出口に一台の高級車がとまっていた。

「乗つじ。」

「、、、、、、」

「早く。」

「はいはい」と。

俺はもはや何もする気にもならなかつた。

「つたぐ。もう、ビビりでもなれ。」

俺は誰にも聞こえないくらいの声でちこちこへじました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2186ba/>

---

トラウマと四番バッター

2012年1月14日23時50分発行